

倉天心全集

別卷

平凡社

岡倉天心全集 (全九卷)

別巻 定価 五四〇〇円

一九八一年七月一〇日 初版第一刷発行

著者 岡倉天心

発行者 下中邦彦

発行所 株式会社 平凡社

東京都千代田区四番町四番地
郵便番号一〇二
電話〇三(二六五)〇四五一
振替東京八一二九六三九

印刷 東洋印刷株式会社

製本 株式会社石津製本所

凡 例

一、本全集は、岡倉天心の著書、著述、講演、談話、未発表草稿、日記、ノート、書簡などを、現在可能なかぎり蒐集し、これに関連資料を付して、集大成したものである。

二、著書、雑誌、新聞に発表された論稿は、原則として初出を底本とし、自筆原稿あるいは異本との異同を校訂した。

三、英文の著書、著述、未発表草稿、書簡は、厳密な校訂をほどこした後、すべて新訳して収録した。

四、自筆の日記、旅行日誌、古社寺調査手録、ノートなどは、できるだけ原型を損なわぬよう翻刻した。

五、収録文は底本を忠実に翻刻することを旨としたが、読解の便宜をはかるため、次の方針で整理した。

- 1 原題のない草稿や新聞掲載の講演速記などには、編者による標題を掲げた。
- 2 漢字は新字体を使用し、俗字・略字は通行の字体に改めた。
- 3 あきらかな誤字・誤植は訂正し、誤使用あるいは正誤を判断しかねる用語・用法には、その初出に「ママ」を付した。また、現在通行の用法では誤字・誤記に類する用法も、文意が通ずるかぎりは敢えて改めなかった。

- i 凡 例
- 4 仮名遣い、平仮名・片仮名の別、および濁音表記は底本通りとし、変体仮名(例 ま↓れ)、合字(例 𛄁↓トモ)などは通行の文字に改めた。

- 5 底本が自筆原稿の場合、文意の通じにくい字句、固有名詞の誤記などは「」内に註記した。(例 渴ヲ医スルハニ)足ル、姜委〔継〕
- 6 句読点、改行、字下りなどの扱いは、通行の方式にしたがって整理したが、底本が自筆原稿、書簡などで句読点のない場合は、おおむね句点にあたる箇所および読み誤りやすい箇所を一字あけにした。
- 7 みせ消ちは原則として翻刻せず、内容理解に必要と思われる場合のみへゝ内に翻刻した。欄外の記入は「」で相当する箇所挿入した。
- 8 破損、その他判読不能の箇所は、□□、□□、□□のように示した。
- 9 必要に応じてルビを付し、現代仮名遣いをもって表記した。底本が総ルビの場合は、特殊な読み方などを残し、他は省いた。
- 10 天心作の漢詩は第七巻で一括して訳註を付すため、本文中では白文のままとした。

本巻(別巻)には、以下の資料および年譜等を収録した。

まず、合評・総評は、日本美術院で行なわれた絵画研究会や互評会席上での合評や総評(『日本美術』に掲載)を年代順に配列した。

雑録は、新聞・雑誌に掲載された短い談話や展覧会の審査報告、さらに新聞記事に類するものを年代順に配列した。

資料は、岡倉天心が直接関係した資料、あるいは天心の行動を記録した新聞、雑誌の記事を選択のうえ、年代順に配列した。

岡倉天心あて書簡は、本全集第六巻および第七巻に収録した天心書簡と直接関係のある書簡を中心に、選択したうえで年代順に配列した。

追悼記は、天心の死去を報じた新聞記事はじめ、新聞・雑誌に掲載された故人の関係者の追悼談、追悼記、追悼会記事を収録した。

補遺には、天心書簡一通と自筆履歴書断片を収録した。

なお、収録記事の出版等は、各々の文末に記した。

年譜・系図は全著述、および関係資料を参考に、できるだけ詳しいものを作成した。

目 次

凡例

合評・総評

- 絵画研究会一斑 5 第六回絵画研究会 6 第七回絵画研究会 9 第八回絵画研究会 13 第九回絵画研究会 17 第一回互評会 21 第一回絵画研究会 30 第三回絵画研究会 35 第四回絵画研究会 45
 第五回絵画研究会 52 第六回絵画研究会 56 第七回絵画研究会 59 第十回絵画研究会 62 第九回絵画互評会 63 第十回絵画互評会 68 第十九回絵画研究会 76 第二十二回絵画互評会 77 絵画共進会審査批評 84 第二十三回絵画互評会 97 第二十回絵画研究会 104 第二十一回絵画研究会 109
 第二十二回絵画研究会 110 第二十三回絵画研究会 110 第二十四回絵画研究会 111 二十日会新作画評 113 国画玉成会研究展覧会出品画合評 114

雑録

- 岡倉文学士の説明 125 岡倉審査長の審査概略 126 故狩野芳崖、故小川松民両先生追善会 127 懸賞
 仏画募集広告 128 現今の油絵界 129 近世の三大画家 130 東京美術学校の由来と方針 131 第五回美
 校校友会大会祝辞 132 日本絵画協会の会合に於て 133 第一回全国絵画共進会審査報告 133 新古美術
 品展審査梗概 134 日本美術院第一回展談片 135 岡倉文学士の談話 136 東洋歴史画題展談片 137 青
 年絵画研究会摘要 138 雅邦翁の絵画 139 日本美術院岐阜展にて 140 図画教授法講習会にて 141 第
 九回絵画共進会報告 141 第十一回絵画共進会報告 143 印度だより 143 岡倉覚三氏の土産 144 佳寶

ビゲロー博士の迎待	145	美人談	146
ける日本美術	150	日本画の将来	153
米画界の昨今—岡倉覚三氏の帰朝	156	国宝出品の決定	154
		岡倉氏の帰朝—日本服で世界旅行	155
		欧	
資料	159		
奈良の古美術・森田思軒	161	東京美術学校騒動文書	166
遊	173	三日間の岡倉覚三氏	177
術を語る	182	天心先生格言録	187
		日本美術と米国	189
岡倉天心あて書簡	191		
追悼記	307		
岡倉覚三氏逝く	309	同窓時代の岡倉氏・牧野伸顕	310
短共に露呈・徳富蘇峰	312	岡倉覚三先生を悼む・黒田鷗心	313
祭を行へ・林田春潮	315	美術界唯一の恩人・正木直彦	311
も・斯波淳六郎	318	天才の長	
根岸時代の岡倉覚三氏・饗庭篁村	319	不再出の鬼才・高村光雲	317
見たる岡倉覚三氏・伊東忠太	322	岡倉氏の面影・山本笑月	314
我が岡倉先生・塩田力蔵	325	美術	
訃報	352	予の	
ス	355	オ	
ポストンに於ける故岡倉氏追悼会・矢吹慶輝	359	岡倉氏のこと	
故岡倉先生追悼会の記	361		

補遺	37 ^x
天心書簡補遺	373
自筆履歷書	374
年譜	375
系図	44 ^x
岡倉天心全集総目次	447
編集後記	458

岡倉天心全集
別卷

合評・総評

絵画研究会一斑

絵画研究会は、日本美術院絵画部の正副員及び日本美術協会員中の有志者等より組織せられ、昨年十月以来、毎月二十五日を以て美術院に参集し、前月の宿題に係れる会員各自の作画を互評し、兼て絵事を談論し来り、既に第一回（昨年十月、画題随意）（十一月の画題は「落葉」の筈なりしが、絵画共進会の為め休念）、第二回（十二月、画題「寒梅」）、第三回（本年一月、画題「寒天」）の会合を経たりしが、其第四回は、去る二月廿五日「春曙」の画題を以て開会せられ、尾形月耕、川合玉堂、水野年方、村田丹陵、梶田半古、上原古年、小堀鞆首、寺崎広業、横山大観、菱田春草、木村武山、下村観山、鈴木華村、河村清雄、岡倉覚三、剣持忠四郎、其他二三氏の参会あり。

右画題を決するに先だち岡倉氏は近来一般の画風を評して、『其多くは、経營の苦心に責めらるゝより、徒に伶俐に奔り奇巧を弄するのみにして、知らず識らず纖弱萎靡の弊に陥りたるの嫌ひあれば、今後は主として規模の宏大と筆力の雄健とに注意せざるべからず。古来、宋人并に雪舟等の画にはボルトとして規模宏大なるものあり。其後、常信の作には規模稍大なるものありしも、探幽の山水大幅等に至りては、雅邦氏も曾て談られし如く、往々にして全局のシマリなく、殆ど持て余されたるが如きものあり。殊に応挙以来は尚更小規模に赴きて、今日に至り其嫌ひ最も甚しき様なるが、中に独り雅邦氏の作は器局小ならず、当日同氏より出陳されたる「春曙」の図の如きも、結構頗る簡潔ながら、其局面自ら遠大の越きあり。』

との意見を述べたれば、一座之に於じて、「春雨」「春暖」「新緑」「風雨」等の新題を提出し、爾来大に筆力墨色を聞はさんと意気込みしが、近頃毎回風景画にのみ偏したればとて、遂に「隠者」を以て次回の宿題とは定めしなり。

又右の規模を雄大ならしむべき説より、延て筆力墨色の議論も出で、『此際描線に主力を用ひて、暈染をば寧ろ次に置かんか。』との意見もあり。先づ岡倉氏は『昔時の儘の絵画に

ても、今一步は進むべき余地を存するならん。』と説き、華村氏は『純然たる墨画にして、一も彩色を仮らざる製作を試みまし。』と唱へ、大観氏も亦『繪具は無くとも、画意は必ず達し得べく、要は急処を捉ふるに在るのみ。』と弁じたり。又岡倉氏は『繪具を首め、絵画用材料の物質的改良をも心掛けたきものなり。』と説き、広業氏之に和して、『殆ど永久不変にして、且つ重みある繪具の採用されんことを望む。』と言はれしが、独り油画家たる河村清雄氏のみが、却て之に同せず、『従来、の日本繪具其儘にても、油画ほどの効果を呈するに充分なるべければ、之が改良は敢て、目下の急務にあらざ。』とて、反対の意見を述べられたり。諸他の事情は姑く舍き、其繪具の空気が及び日光中に在りて、成るべく不変色ならんことを望むは、東西画風の如何を問はず蓋し目下一致する所の輿論には非ざるか。

『日本美術』第十七号（明治三十三年三月二十七日）掲載

第六回絵画研究会

当日（六月二十五日）来会せしものは、橋本雅邦、尾形月耕、横山大観、下村観山、菱田春草、木村武山、尾竹竹坡、尾竹

国観、岡倉寛三、劍持忠四郎、高橋太華の十一人にして、画題は千山万岳、出品は、雅邦、月耕、大観、春草、観山、武山、広業、古年、竹坡、国観の十点なり。陳列の順序によりて例の如く互評に入る。

木村武山氏筆

作者自評『題意は此の如くなるべきものかと考へてヤツて見たれど、更に千山万岳の趣現はれず。』

雅邦『題としては如何、但し其趣見えざるにあらず、通常の画としては頗る面白き図なり。』

月耕『同感。』

大観『下部の岩なくても宜しからん、水上を舞ふ燕もなき方深かるべきか。』

春草『同感。』

観山『雅邦先生と同感。』

岡倉『上部の山と下方の岩と、其筆致を異にす、故に画面に不調の痕あるが如し。更に形状の変化を要すべきか。』

淡山実にて峻嶽重疊の趣あり、而して碧水憺むらくは深谿百折の姿なし。水辺の岩の如き、或は实景の実写に過ぎて、却て実に遠さかるの観あるか。水上舞燕を添ふものは、山燕によつて幽邃深奥を表せんとしたるものなるべし、而して画面

の渾和を欠くが故に、徒に長物視せらる。岡倉氏の不調といふもの尽せりといふべし。

下村観山氏筆

作者自評『山を一つ描きても、千山万岳と見ゆる様にと考へて描きたれども、更にかく見えざるものとなれり。』

武山『面白し、唯図としては、大山の後に見ゆる遠山は、なくともよろしき歎。』

春草『結構なり、別段いふべき所なし。』

大観『黒味とか、何とかを今少しほしき様なり。』

月耕『前山に濃きくまを施し、遠山を少しくはなしたし。』

雅邦『只大きい考へばかりにして、それが出ずに終りたりと

謂ふべし。』

岡倉『高山若しくは大山の画としては頗る妙ならん。山の一塊兀立するといふに過ぎざる状あり。千山万岳の画題としては、未だ其致を得ざるもの歎。』

衆評尽せり。実に其高と大とを期して、其深と遠とを忘れたるの観あり。其濃淡の線条を省き暈染未だ足らず、宛も未了の図の如きものは、すべて此高大を傷けんことを憚りしにあらん歎。

寺崎広業氏筆

観山『結構なり。』

武山、春草、評なし。

大観『画題として結構なり。』

月耕『結構なれども、遠山が出ぬ様なり。』

雅邦『突兀として大なる前山は要なし。この山の半分を去らば宜しからん。中央より縦切して、其左半を取らば、画題に適する好作ならん歎。』

岡倉『画題としては適する作ならん。唯更に幽遠にして無究の所あらんことを望むのみ。』

用筆の健、用墨の奇、遠山重疊の状、蓋し至れるものといふべし。唯其健に任せて筆力を弄するの風絹素の面にあらはるるは惜むべきのみ。前山奇に過ぎて、岩石の如く老樹の如く、見て不要のものゝ如く思はるゝもの、すべて他の長処より来りし欠点歎。

上原古年氏筆

観山『前景後山、図様中截して、宛然二図の如し。』

武山『画題としては如何、作者或は誤解せられたるにあらざる歎。』

春草、大観、月耕、すべて観山に同感。

雅邦『後山前景夾に統合を欠く所あるが如しと雖ども、一体